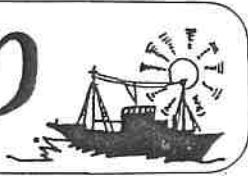


福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

三・一ビキニ事件記念集会開く

ビキニ被災四十一周年の三月一日、東京の文京区民センターで、平和協会主催の「三・一ビキニ事件記念集会」がひらかれました。集会には、青年・学生、婦人、科学者、ジャーナリスト、写真家、平和運動家などおよそ五十名が参加しました。第五福竜丸乗組員の大石又七さんも参加しあいさつしました。会場には森下一徹さんの展示組写真がいっぱいに展示され

マーシャルから ネルソンさんレモヨさん



見学中の高校生に語るネルソンさん

被爆五十年の歴史と被爆者の永年のたたかいを訴えました。主催者挨拶で川崎昭一郎会長は、被爆五十年の三・一の歴史の意義にふれながら、いま第五福竜丸は人々の心のなかに平和のとりでを築き根付かせていく大きな役割を果たしていることを強調しました。つづいて小川雄立教大名誉教授(平和協合理事)が、「戦後五十年と核兵器問題」として記念

ルソン・アンジヤインさん、レモヨ・アボンさんが展示館を訪れました。焼津と静岡で開かれた三・一ビキニデーの諸行事に参加されていたもので、ネルソンさんは何回目かの来館ですが、レモヨさんははじめて。「明日マジュロに帰りますが、レモヨが第五福竜丸に会いたいといっていますから」とネルソンさん。ちょうど来館の大石又七さんと握手し、見学中の高校生にも語りかけました。レモヨさんはロンゲラップの被ばく者で、いまメジャットの学校の先生。ネルソンさんとともに熱心に船と展示パネルを見終わって、机の上に拡げられた「ビキニ」「グッドバイロンゲラップ」等の

講演を行ないました。小川氏は、戦後の五十年は、米ソの冷戦を背景とした軍備競争、核兵器開発の進展と、これに重層的に対抗する非同盟・非核兵器諸国、市民、民衆のねばり強い核兵器反対運動の発展とせめぎあい、対立の半世紀であったと基本的構造を示しつつ、①戦後の核兵器問題の概観②軍縮の進展と残された諸問題③反核世論と運動の活性化を柱に、スライドを使いながら約二時間熱弁をふりました。

写真集に見入りながら「この老人は父、これは母、私はここ」と、一九七四年七月全身のがんで瘦せ細って亡くなったオエミ・ナプタリさん、一九八五年五月ロンゲラップからメジャット島への移住の日、海のかなたをぼんやりながめていたセーラ・ナプタリさん、ロンゲラップの小学校で一年生から八年生まで七八名全員の子供たちと三人の先生を撮った写真を示しつつロンゲラップの被ばく者の四一年と自身の思いをぼつりぼつりと語りました。終始優しい表情のレモヨさんでしたが、帰りが船尾の前で撮った記念写真にやっと笑みが浮かびました。

滋賀県から多くの中学校

三月一日をはさんで各地から修学旅行の中学生が来館しています。滋賀県の中学校が目立ちました。坂田郡大東中、双葉中、蒲生郡朝枝中、八幡中、近江八幡市八幡西中などで、それぞれ平和宣言を読み上げたり、折鶴、寄せ書きを持参したりと熱心に見学、月末にかけ愛東中、豊日中、びわ中と続きます。

展示館で卒業記念授業
また、三月三日には、東京世田谷区の調布学園高校の女生徒三十名が来館、船の甲板を特別教室に大石又七さんの被ばく体験に聞き入りました。八日には卒業式という三年生で「思い出深い卒業記念授業でした」とうれしそうでした。

ビキニ被爆者の援護にむけて

及川 佐

私たち平和と軍縮をめざす全国連絡会と第五福竜丸展示館とのお付き合いは、多分十年以上になるのではないかと思います。今まで毎年九月二十三日(久保山愛吉さんの命日)には、展示館で集会や学習会を行ってきました。昨年の九月二十三日はジャーナリストの岩垂弘さんを講師に学習会を開催しました。第五福竜丸乗組員の大石又七さんも参加してくれました。

そこでちょっととしたショックを受けました。というのも大石さんの話のなかに「久保山さん以外にも亡くなった方(七名)を被爆者として認めてほしい」ということがあったからです。その話を聞いて以来、そもそも被爆者とはどのような人たちを意味するのか?被爆者援護法の対象者は?など様々な疑問がわき出てきました。たまたま私自身が、在韓被爆者問題に関心を持っていましたので、同様な疑問を在韓被爆者をはじめとした在外被爆者の立場からも突き付けられていました。その後学習会を重ねながら、ビキニ事件を立ち入って調べれば調べるほどますますわからなことがでてきました。その第一は、第五福竜丸の乗組員をはじめビキニ水爆実験の影響を受けた

多くの被災船に乗っていた人びと(被災船は八五六隻ともいわれている)はどうなっているのだろうか?ということ。すでに四〇年を経ている被災した人びとは高齢化し、おそらく人知れず心身の悩みを持ちながら生きておられる方も多いと思います。

しかし、大石さんが「被爆者として認めてほしい」というのですから、ましてや第五福竜丸以外の乗組員はどのようなになっているのでしょうか。第二は、日本政府がこのビキニ事件にどのように関わってきたかということ。日本政府は乗組員のビキニ被災について、一九五五年にアメリカから支払われた二百万ドルですべて決着済みの立場と思われま。すべて決着済みとは無茶苦茶な話ですが、百歩譲ってこの日米間で合意が有効で決着済みとしても、政府は、第五福竜丸の乗組員を被爆者として、広島・長崎の被爆者と区別するのではなく「原爆一法」また新しい「被爆者援護法」の対象として組み入れるべきです。

もちろん前記の法律は広島・長崎の被爆者が対象となっており、ビキニ被爆者を救済する法律がないことは承知していますが、一九五七年成立の「被

爆者医療法」の成立過程を調べてみると、結果としてビキニ被爆者を対象から外したというよりも意図的に外しているのではないかのようには思えるのです。また第五福竜丸の乗組員が通院していた千葉の放医研(放射線医学総合研究所)などの対応は、治療というより調査することに力点が置かれているように思われます。

このようなことをつなぎ合わせると、政府はビキニ水爆実験による被爆者の存在を、法律的にも社会的にも覆い隠したいのでは、と疑いたくなります。第三は平和・原水爆禁止運動がビキニ被爆者の援護を一貫して要求し、たかかってきたのかということ。もちろん私たちも残念ながらそのような運動を充分には展開してきませんので、非難がましいというのはいけません。が、ビキニ被災を核兵器廃絶のシンボルとして、あるいは平和教育の立場で活用することはあっても、被災船の乗組員の救済や、被爆者同士の連帯を要求してきたことは少なかつたと思えます。私からみると第五福竜丸平和協会もまたそのことに對してはきわめて不十分であつたように思えるのです。

ビキニ被爆者の援護を大きな運動にするために、私たちは全国で活動している多くの人びととともに協力していきたいと思えます。(平和と軍縮をめざす全国連絡会)

核兵器と科学者

原爆開発の興奮と痛恨 (2)

——連鎖核反応の夢を追いつけたシラード博士——

小川 岩 雄

連載 3

一九三〇年代前半から三十七年ごろまでは、大量の核エネルギーを人為的に取り出すことは、それがどれほど魅力的な目標であるとしても、実際にはほとんど不可能と考えられていた。実際、例えば原子核の存在を初めて実証し、原子の太陽系モデルを確立し、さらには核反応による核の人工変換にも成功したイギリスのラザフォード卿なども、三三年九月十二日の新聞紙上で、講演後の質問に答え、「(加速粒子による)核反応は、エネルギーを得る方法としては、きわめて拙劣で効率の悪い方法でして、いま原子の変換に動力源を捜し求めるなどという人は、八月の光の話をして(=妄想を追って)いるだけです」とまで言い切っていたし、アインシュタイン博士も三十七年ごろは核エネルギーの利用はまだ夢物語だと信じていたようだ。

研究者の野心と情熱をますます掻き立てる、ということもまた真実である。彼らは学界から異端視されることを恐れず、絶えず巧妙なアイディアに胸を躍らせ、ある時は一夜でその根本的欠陥に気付いて落胆に暮れたりしながら、粘り強く解決を目指すのである。彼らの多くは結局挫折するが、稀には幸運にも目標を達成し、前人未踏の新分野の扉を開く栄光を手にするものもある。その意味では彼らはヒマラヤや北極の征服を目指す命がけの冒険家に似ているとも言えよう。ハンガリー出身の少壮物理学者レオ・シラード博士はまさにそういう科学者の一人であった。

彼は抜群の才気と突飛な着想力に富み、在学中から熱力学の基礎理論や今日のいわゆる情報理論について先駆的な論文を書いたり、アインシュタインと共同で流体金属を駆動する電磁ポンプの開発を進めたりしていた。しかし一九三二年ごろから中性子の発見や核の人工変換の成功などで、にわかには活気付いた核物理に強く引かれ、とりわけ核エネルギーの解放という夢のような課題にほとんど「取り憑(つ)かれ」てしまった。その有力な動機の一つは、有名な科学小説家H・G・ウェルズの未来小説「解放された世界」(一九一四年)を読んだことだと本人が書き残している。その粗筋は人類が核エネルギーの取り出しに成功して原爆が開発され、「一九五九年に」核戦争が起り、世界中の大都市が壊滅したのち、初めて世界政府が作られる、というものだった。

核物理を研究し、核エネルギーの解放をせよ実現したい、と思ったという。一九三三年、彼がロンドンに来ていたとき、ラザフォードの新聞記事を見て核エネルギーの解放にだめなかしきりに考えていて、突然連鎖核反応のアイディアが浮かんだ。「もし中性子によって割れる(核を持つ)二元素で、しかもそれが1個の中性子を吸収するさいに2個の中性子を放出するような元素が見付かるなら、そのような元素を充分大量に集めれば、原子核連鎖反応を維持することができるわけだ!」

(立教大学名誉教授・協会理事)

市民の側から科学を変える

上 田 昌 文

一年半前から市民十数名が毎月二度ほど集って、科学技術と関連する様々な社会問題を研究しています。「科学と社会を考える土曜講座」という名の活動です。自然科学の研究者の道を歩んでいた私か、八〇年代に育ちつつあった非核太平洋運動やアジア太平洋地域の核被害者の支援活動にいくらか関わるようになったことを一つの契機にして、「科学技術のあり方そのものを考え直してみよう」という思いで始めました。

二年半前から市民十数名が毎月二度ほど集って、科学技術と関連する様々な社会問題を研究しています。「科学と社会を考える土曜講座」という名の活動です。自然科学の研究者の道を歩んでいた私か、八〇年代に育ちつつあった非核太平洋運動やアジア太平洋地域の核被害者の支援活動にいくらか関わるようになったことを一つの契機にして、「科学技術のあり方そのものを考え直してみよう」という思いで始めました。

最後に紙面をお借りして読者の方々に二点、文献についての教えを乞いたいと思います。最近『ヒトラーを読む』(阿部良男著、刀水書房)が出版され、話題を呼んでいます。著者が独力で膨大な日本語文献を漏れなく収集、それらを内容別に分類し問題を付した力作です。原水爆被爆問題について同様の作業はかつてなされたことがあるのでしょうか。現在取り組んでおられる方はいらっしゃるのでしょうか。海外の文献については、どの程度の収集がなされているのでしょうか。これまで被爆者の心の痛みを顧

み込まれた科学を私たち市民が適正に制御できないでいるという問題が横たわっています。「土曜講座」の活動はこの問題の大きさに比してごくささやかなものですが、先の三つの特徴を生かした研究・交流を継続することで、専門家と非専門家の垣根を崩し、市民の側から科学を変えていく方途を探り出せるのではないかと考えています。特に今年には被爆五〇年という節目の年であり、核問題についてさらに認識を深めたいと思っています。

〒152 東京都目黒区碑文谷5-1-1 上田昌文

TEL:03-3777-3624